

ありがとうのたん生日

今日はみちおのたん生日。それなのにお父さんは急な仕事で帰ってこれないというのです。ゆうべからそのことでへそを曲げていたのです。

「みちお、いつてらつしゃい。」

みちおは、お母さんにへんじもしません。

「車に気をつけるんですよ。」

「うるさいなあ……。今日は、ぼくが生まれた、ぼくだけのたん生日なのに。」

「お父さんもお母さんもわかってないよ。」

みちおは、わざとげんかんの戸をガシャンと強くしめて出て行きました。

学校でも、いいことはありませんでした。算数のノートは忘れるし、いつものドッジボールでは、けがをするし……「おめでとう。」って言ってくれたのは、親友のけんただけでした。

「つまんないなあ……。」

学校から帰っても、みちおのきげんはなおりません。ごちそうを作っているお母さんの横に来て、しかめつつらで言いました。

「あーあ。よそに食べに行きたいよ。」

「お父さんが帰った日に行けばいいでしょ。」

「それに今日は、おじいちゃんとおばあちゃんが、わざわざ、来てくださったのよ。」

みちおは、ドンドンと大きな足音を立てて、そのまま二かいの自分のへやに上がって行ってしまいました。

ふと見ると、つくえの上に手紙がおいてあります。お父さんからです。

きつと、朝の出がけにおいて行つたのでしよう。みちおはふうを切つて見てみました。

みちお、九才のたん生日おめでとう。早いもので、あれから九年もたつたねえ。みちおは、お父さんとお母さんが長い間、まって、まって、まちつつけて、やっと生まれてきた子なんだ。

なかなか赤ちゃんがでなかつたので、びょういんに行つたり、神さまにおねがいに行つたり、そりやあがんぼつたんだ。けつこんして六年目、お母さんのおなかの中に新しい「いのち」をさすかつたことを知つた時は、そりやあもううれしくて、二人ともとび上がつてよろこんだものさ。それから毎日、お母さんのおなかとにらめつこだ。

いよいよ生まれるつていう時、たいへんなことが起きてしまつたんだ。へそのおが赤ちゃんの首にまきついていて、おいしゃさんが、このままじゃ「赤ちゃんのいのちもお母さんのいのちもあぶない。」つて言うんだよ。お父さんはもう、ただいのることしかできなかつた。

みちおの声を聞いたのは、八時間も手じゅつの後だった。

「赤ちゃんのいのちもお母さんのいのちもぶじです。男の子ですよ。」

おいしゃさんの言ばに、おじいちゃんはこしをぬかすし、おばあちゃんはおいおいなき出すし……お父さんかい？

おいしゃさんにだきついちゃつたんだ。

でも、それからがたいへんだつたんだ。しばらくは、おっぱいをあげられなくてね。それでもお母さんのおっぱいをあげたいつて、毎日びょういんに通つたんだ。

そうして、はじめてだつてきた日、お父さんとお母さんは、声をそろえて言つたんだよ。

「うまれてきてくれて、ありがとう。」

あれから十年、今でも同じ気持ちだよ。

生まれた後も、みちおがびょう気をした時は、みんなで心ばいして、なんどもびょういんに通つたんだ……。

みちおが元気でいけることが、お父さんたちの何よりのしあわせなんだ。

今日はやくそくをまもれなくてすまなかつたな。お母さんにおねがいしてるから、ほしいものをおねだりするといひよ。

お父さんより

手紙を読み終わると、みちおは、自分が小さいころから今までのしやしんを一まい一まい見ながら、「自分のいのち」についてあらためて考え始めました。

みちおは、お母さんのところへとんで行きました。そして、うれしそうな顔でこう言つたのです。

「お母さん、ありがとう。ぼくが生れた日は、ぼくだけのたん生日じゃないんだね。」